

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：34309

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K04719

研究課題名(和文) 教員養成課程における音楽的創造力を高める教授法の開発

研究課題名(英文) The Development of a Teaching Method to Improve Musical Creativity in Teacher Training Course

研究代表者

佐野 仁美 (Sano, Hitomi)

京都橘大学・発達教育学部・准教授

研究者番号：10531725

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、音楽経験が豊富でない幼稚園・小学校教員養成課程の学生の創造性を高めるための教授法を開発することである。本研究では、音色や強弱等、音の性質に気づくためのソフトや、即興練習曲等の多くの教材を作成した。それらを用いて実践を行った結果、単に音階を並べてそこから音を選ぶような学習というよりも、音楽的なイディオム(慣用語)を身につけ、それを選んだり、変化させたりして試し、音楽の仕組みに気づく経験の重要性が明らかになった。同時に、現場の実情と乖離しないよう、幼稚園から小学校低学年において音楽づくりの素地を養う数個のプログラムを考案し、その成果を学生の学びに役立てるようにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、音の性質に気づき、音のイメージと即興演奏を結び付けることを目指して、鍵盤の触れ方の諸要素を出力に反映し、音や映像を生成するソフトを開発した。音の性質を視覚化し、音の持続を意識する感覚を養うためのソフトである。また、音楽経験の少ない学生のために、創作の基礎となる型の習得を目的として、様々な様式における即興練習曲を作成した。学生が旋律断片を選んで音楽をつくることにより「音楽づくり」や創作を行うための欠かせない要素となる、音楽の特徴や仕組みに気づくことができる。まとめとして、音楽の構成面に着目し、演奏表現、鑑賞、創作についての総合的な教授法に発展させ、作成した教材とともに出版した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to develop a teaching method to improve the musical creativity of students in teacher training courses at elementary schools and kindergartens, who don't have a lot of musical experience. To this purpose, we created software to highlight the different nature of musical sounds, and produced a variety of teaching materials, for example improvised music. After we taught the students using these materials, it became clear that the kind of experience that our materials encourage was important in that it enabled the students to acquire a knowledge of musical idioms and understand the mechanism of music by trying to choose or change it, instead of just choosing from a given list of musical scales. As we developed the method, we created some programs aimed at increasing the creative musical base for kindergarten and lower-grade elementary pupils. Finally, we shared our results with university students in the hope of contributing to their undergraduate studies.

研究分野：音楽教育学、音楽学

キーワード：創造性 音楽づくり 即興 教授法 幼稚園教員養成課程 小学校教員養成課程 表現遊び

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

2008年に告示された小学校学習指導要領より「歌唱」「器楽」と並んで表現活動として位置づけられた「音楽づくり」の分野に関して、小学校の音楽の授業における実践は、他分野に比べ、まだ充分とは言えない。その原因は、教員側の経験やどのように教えればよいかという知識や経験の不足にあると考えられる。

他方、幼児教育の実際において、幼児の表現活動の中には身の回りの音に気づく、その音を使って表現してみるといった「音楽づくり」の「芽」が含まれており、保育者は幼児の活動を支援することが望まれている。そこでは、既成の曲をそのまま演奏することよりも、むしろ子どもの自由な表現にあわせて、即興的に演奏することの方が幼児教育の本質に近い。

しかしながら、幼稚園・小学校教員養成課程においては、ピアノ等の演奏や歌唱の指導に重点が置かれているのが現状である。限られた授業時間の中で、楽曲の演奏という、目的や到達点が比較的「分かりやすい」分野が優先される傾向があるのに対し、体系的な指導法が確立されていない創作分野はなおざりにされやすい。その結果、将来教員となる学生たちの創作能力は決して高いとは言えず、学生の創造力を育むことは急務である。

2. 研究目的

本研究の目的は、幼稚園や小学校教員養成課程に在籍する音楽経験の豊富でない学生の創造力を高めるための教授法を開発することである。現在、小学校の授業における「音楽づくり」の活動については、まだ授業研究が進められている段階であり、多くの学生は自らの経験に基づいて、どのように指導すればよいかという具体的なイメージを持つことができていない。その一方で、「音楽づくり」の基礎となる力は幼児の表現活動から連続して培われるはずである。幼児期の表現を支援したり、小学校の「音楽づくり」を指導したりする教員には、「音楽づくり」の豊かな経験や高い音楽的創造力が求められる。

本研究では、教員養成課程の現状に即した効率のよい形で、創作活動から得られた知見を他の表現活動や鑑賞活動に活かすように工夫して、将来教員となる学生たちの創造力を高めるための教授法を構築し、教材を作成する。

3. 研究の方法

本研究の研究方法は以下の通りである。

(1) 戦後から現在に至る教科書や指導書に掲載されている創作や「音楽づくり」の教材、指導方法を取り出し、分類した。同時にそれぞれの教材や指導法について、創作に必要などのような力と関わっているかという視点より、有効な点、課題点を整理した。

(2) 日本音楽を取り入れたプログラムの構築のための基礎的研究として、日本の作曲活動についての先行文献や雑誌記事、楽譜や録音資料を収集し、作曲家たちが邦楽器や日本音楽とどのように関わってきたかという点に着目して整理した。

(3) 「音楽づくり」の実践で得られた音楽の要素への気づきを創作に活かすために、20世紀の音楽における様々な手法を参考にして、音の強弱、速度、音色、構成等を視覚化し、鍵盤楽器の演奏と結び付けるソフトを開発した。

(4) 旋律の基礎的な創作方法の一つは、言葉に由来するものである。日本語の特徴を学習し、その特徴に沿った旋律を創作するための方法を考案した。

(5) 創作活動の下地となるのは、多くの音楽体験であると考えられる。創作の基礎となるような型の習得を目的として、それらを選んで音楽をつくる、即興のための練習曲を数多く制作した。この即興練習曲は、ピアノの練習曲としての側面も持つものである。さらに汎用性の高いものにするために、現在の日本でよく用いられている西洋音楽や日本音楽、ロックやジャズ等のポピュラー音楽からリズム、音階、音の重なり、楽曲構成等の要素を抽出し、幅広い様式における即興練習曲を考案した。

(6) 教育・保育現場と乖離することなく、実際の子どもたちの状況を踏まえて、教員養成課程の学生に資する教授法を開発するために、現場の幼稚園や小学校の教員と連携して、「音楽づくり」の素地を養うための表現遊びや「音楽づくり」のプログラムをつくって実践し、結果を分析した。

(7) 上記の教材や指導法を用いて教員養成課程の学生に指導を行い、効果を検証して修正を加えた。研究成果は研究会や学会で発表し、そこで得られた知見をフィードバックさせながら、教授法を構築した。

4. 研究成果

本研究の成果は以下の10点にまとめられる。

(1) 戦後日本の小学校音楽科の教科書や指導書に掲載された創作から「音楽づくり」に至る活動について、教材および指導法の記述を収集し、学習指導要領の改訂ごとにそれらの傾向をまとめ、特徴的な教材や指導法を挙げて、変化の様相を具体的に示した。戦後、学習指導要領の内容

に沿って、創作活動にもそれぞれの時期の考えが反映され、西洋音楽をモデルにした作曲を行うにあたって用いられる調性や形式など、児童に求められる創作の内容やレベルは変化してきた。そして「音楽づくり」の前身である「創造的音楽学習」は、西洋音楽一辺倒ではない1960年代のわらべうた教育や、オルフやコダーイによる民族的な音感を重視した教育が積み重ねられ、1980年代の民族音楽の学校教育への導入という動きの中で行われ、広まっていったと考えられる。以上のように、戦後の音楽教育の流れに「音楽づくり」を位置づけることができた。

(2) 明治以後の日本の作曲活動について、作曲家たちが邦楽器とどのように関わってきたかという点を明らかにした。明治末に流行した和洋調和楽から、箏演奏家の宮城道雄を中心とし、西洋音楽の影響を受けた新日本音楽、新日本音楽の演奏家と合作した西洋音楽の作曲家、日本音楽や邦楽器に新たな意味を見出した戦後の前衛音楽家たちに至る邦楽器を用いた作曲を辿った。そこで得られた知見とともに、研究分担者の小畑が演奏家と共同で声と箏による作品を制作し、邦楽器を西洋音楽の創作に用いる場合の困難な点を学会で発表した。

また、「日本的なもの」をどのように西洋音楽の手法を用いて表現するかという視点から、日本の民族派作曲家の作品を調査した。特にドビュッシーらの近代フランス音楽の影響を受けた最初期の日本人作曲家である菅原明朗の作品数曲を分析し、民族性の表現手法や日本音階に近い旋法を用いた旋律創作法を明らかにした。

(3) 小畑が「図形楽譜を用いた即興演奏による表現の新たな可能性 MIDI 情報を媒介とする音楽とコンピュータ映像の統合」(『音楽表現学』vol.2、2004年)で考案したシステムをもとに、コンピュータ・ソフト「Max_impro」を制作した。このソフトは、学生の発する音に反応することで、イメージした音を鍵盤楽器の演奏に反映させ、創作の学習に寄与することを目的としたシステムである。具体的には、教員養成課程の学生が音の高低、強弱、速度等の性質を理解するために、鍵盤の触れ方の諸要素を出力に反映し、鍵盤に触れた時に音や映像を生成する。学生が表現した音の高低や強弱、速度の違いによって異なる音や映像が提示され、音の性質を視覚的なものに転換することにより、演奏した音の性質に自ら気づき、音のイメージと即興演奏を結び付けることを目指したものである。また、音や映像を発生させることにより、音の持続を意識する感覚を養うこともねらいの一つである。このソフトを用いた指導を行い、学生が自由に鍵盤楽器で遊ぶ様子を観察し、感想票を分析した結果、視覚的なものと強弱や高低等、音の性質とを協働させるプログラムについての関心が窺えた。また、学生には響きを味わう経験が不足しており、その目的において、このソフトは鍵盤楽器の初心者だけでなく、経験者にも有効であることが分かった。

(4) 鍵盤楽器の初心者が演奏可能な数曲の即興練習曲を制作した。その特徴は、動かしやすい指を用いた曲にすること、音の数を少なくして休符を要素に入れたこと、学習者が音型パターンやその繰り返しの回数を自由に選択して、強弱等の音楽的な要素も加え、創作していくことである。この即興練習曲を用いて学生への指導を繰り返し、2度から順に音の範囲を広げて音高の種類を増加させ、すべての指を用いて副次的旋律素材の数を増やし、即興で得られた結果を既存の音楽に近づけていく練習曲へと発展させた。

(5) 教員養成課程の学生が言葉と歌の関係について理解し、感得できるようにするために、簡単な言葉遊びや短い詩から旋律をつくる方法を考案した。具体的には、絵本等から表現の軸となる言葉を選び出し、そこから連想する言葉を選び、言葉のアクセントに従って唱えごとをつくり、そのイントネーションに矛盾しない形で2音音階や3音音階、わらべうたのテトラコルドを用いた音程をつけてみるという内容で、繰り返しや連続性に留意してそれを組み立てていくものである。

(6) 音楽経験の少ない学生にとって、何の手がかりもなく音楽をつくり出すのは難しいと予想されることから、創作の教授法の構築にあたり、学生に音楽的イディオム(慣用句)を習得させるための旋律断片を制作し、それを選んで音楽をつくる方法を考案した。まず、(5)に続くものとして、小学校歌唱共通教材をヒントにした旋律の断片を制作し、それらの音型パターンを選んで、組み合わせることにより、無理なく曲に発展させる教材をつくった。

次に、創作のモデルを学生が親しんでいるポピュラー音楽の要素も含んだものにしたと考え、ブルー・ノートを用いた旋律断片を制作し、それを選んで組み合わせ、音楽をつくる即興練習曲を作成した。学生が旋律断片をいろいろと試す過程で音楽的イディオムを習得し、音楽の仕組みに気づくことができるものである。さらに、日本音階による旋律断片をもとにした即興練習曲を作成した。即興を行うことにより、学生が自然に日本音楽の音の動きや核音を用いた終止について理解し、それらに慣れることも目的としている。その一方で、持続する低音の上に、様々な旋法による旋律断片を選ぶ即興練習曲を考案したほか、和音の音から旋律を発展させる方法を例示し、学生が和音進行のスタイルに慣れ、西洋音楽の和声に合わせて旋律をつくるための練習曲を制作した。

(7) リズムの創作については、グループでアンサンブルの能力を培うために、一定した拍の流れを聞きながら拍のまとまりを様々に感じられるリズムの練習曲を制作し、2拍子、3拍子、4拍子、6拍子のアンサンブルによる即興練習曲に発展させた。これらは学生同士で演奏し合えるものであり、上記(6)の教材とともに、学生への指導を行い、その結果をフィードバックさせて修正を加えた。

(8) 絵本や絵のイメージをもとに旋律をつくる方法を考え、絵画と音楽を融合させたレクチャーコンサートの形で、作品を一般の人に向けて発信した。

(9) 教育現場における創造的な活動と教員養成課程に在籍する学生への指導を繋げ、子どもたちへの指導に活用できるプログラムの開発と、それを学生への指導に応用することの有用性を探った。幼稚園や小学校低学年の子どもを対象にして、オノマトペが多用された絵本や打楽器を使い、身体表現を通して音の性質に気づく音遊び、小学校低学年において絵本のオノマトペから民族楽器を用いたリズム創作に発展させるプログラム、幼稚園や小学校低学年において和楽器の音に気づき、小学校低学年では口唱歌を用いたリズムづくりに発展させるプログラム、小学校低学年においてわらべうた風の作品の途中のフレーズを選んだり、つくったりする教材等を考案した。それぞれのねらいや指導法について幼稚園や小学校の教員と念入りに打ち合わせをした後、数回の実践を行った。授業後には、指導教諭の気づきや授業記録の分析を行い、結果は学会等で発表したほか、教員養成課程の学生に示し、学生が実践の目的や指導法、子どもの様子を理解し、自らの活動とのつながりを意識するようにした。

(10) 研究成果は、学会や論文等で発表したほか、研究のまとめとして教本を出版した。その中で作成した教材を掲載するとともに、人間の記憶を背景にした動機の配置の仕方や音楽の仕組み、時間的なまとまりの捉え方といった音楽の構成面に着目し、演奏表現、鑑賞、創作についての考え方が自然に無理なく身につく総合的な教授法に発展させた。

以上のように、本研究においては、音色や強弱といった音の性質に気づくためのソフトや、即興練習曲等の多くの教材を作成することができた。また、それらを用いて実践を行った結果、単に音階を並べてそこから音を選ぶような学習というよりも、音楽的なイディオム(慣用句)を身につけ、それを選んだり、変化させたりして、いろいろと試すうちに、学生自らが音楽の仕組みに気づく経験の重要性がわかった。このことは、教員養成課程の学生だけでなく、子どもたちの創造性を伸ばすためのプログラムにも応用できるのではないかと考えられる。本研究では、現場の実情と乖離したプログラムにならないよう、幼稚園から小学校低学年を中心に、音楽づくりの素地を養う数個のプログラムを同時に考案し、その成果を学生の学びに役立てるようにした。今後は、幼稚園から連続して子どもたちの創造性を伸ばし、創作につなげる一貫したプログラムの開発に取り組みたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 11件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 岡林典子・佐野仁美・坂井康子・南夏世・山崎菜央	4. 巻 第17号
2. 論文標題 「幼小をつなぐ音楽教育のプログラム開発 「祇園囃子」を教材として 」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『京都女子大学発達教育学部研究紀要』	6. 最初と最後の頁 143-152頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐野仁美	4. 巻 第47号
2. 論文標題 「昭和10年代の日本人作曲家における民族性 菅原明朗《明石海峡》をめぐって 」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『京都橘大学研究紀要』	6. 最初と最後の頁 63-78頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐野仁美・岡林典子・小畑郁男・土田圭子	4. 巻 vol. 37
2. 論文標題 「小学校低学年における旋律づくりの試み 音楽的イデオロギズムに着目した実践の可能性 」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『関西楽理研究』	6. 最初と最後の頁 1-17頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐野仁美・岡林典子	4. 巻 第45号
2. 論文標題 「オノマトペを用いたリズム創作の可能性 協働性に注目して 」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『京都橘大学研究紀要』	6. 最初と最後の頁 83-95頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐野仁美	4. 巻 第27号
2. 論文標題 「吉田隆子の昭和初期における創作活動 モダニズムからプロレタリア音楽へ」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『京都橘大学女性歴史文化研究所紀要』	6. 最初と最後の頁 110-122頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岡林典子・佐野仁美他	4. 巻 第15号
2. 論文標題 「領域『表現』と小学校音楽科をつなぐ和楽器を用いた活動の試み」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『京都女子大学発達教育学部紀要』	6. 最初と最後の頁 109-119頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐野仁美・小畑郁男	4. 巻 vol.35
2. 論文標題 「教員養成課程における鍵盤楽器に親しむ方法の開発 MIDIを用いて」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『関西楽理研究』	6. 最初と最後の頁 133-141頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐野仁美	4. 巻 第44号
2. 論文標題 「戦後日本の小学校における音楽創作活動の変遷 教科書の分析を通して」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『京都橘大学研究紀要』	6. 最初と最後の頁 73-88頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岡林典子、佐野仁美、坂井康子、難波正明・南夏世・山崎菜央・深澤素子	4. 巻 第14号
2. 論文標題 「領域「表現」と小学校音楽科をつなぐ音遊びの可能性 「マラカスづくり」によるオノマトベ表現と共同性の成り立ちに注目して」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『京都女子大学発達教育学部紀要』	6. 最初と最後の頁 117-126頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐野仁美・岡林典子・坂井康子・大久保恭子	4. 巻 vol.34
2. 論文標題 「音楽づくりへつながる幼児の表現遊び 絵本のオノマトベを用いた実践から」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『関西楽理研究』	6. 最初と最後の頁 23-42頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂井康子・岡林典子・佐野仁美	4. 巻 vol.15 (28号)
2. 論文標題 「0.1.2歳の自発的な音声表現から小学校の音楽づくりへ」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『音楽教育実践ジャーナル』	6. 最初と最後の頁 85-94頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐野仁美・岡林典子・坂井康子	4. 巻 vol.33
2. 論文標題 「音楽づくり」へつなげる幼児の表現遊び 絵本を用いた実践をもとに」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『関西楽理研究』	6. 最初と最後の頁 15-31頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐野仁美・岡林典子
2. 発表標題 「小学校中学年の旋律づくりの試み 替え歌を用いて 」
3. 学会等名 日本音楽表現学会第18回大会（誌上発表）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡林典子・佐野仁美・坂井康子
2. 発表標題 「幼小をつなぐ表現教育のプログラム開発 祇園祭を題材として 」
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第30回大会（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐野仁美・小畑郁男
2. 発表標題 「佐野仁美ピアノレクチャーコンサート ドイツ、フランス音楽から日本の創作へ 」
3. 学会等名 レクチャーコンサート（豊中市立文化芸術センター小ホール）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐野仁美・岡林典子・小畑郁男
2. 発表標題 「旋律づくりの指導の可能性 小学校低学年における実践から 」
3. 学会等名 日本音楽表現学会第17回大会（愛知教育大学）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡林典子・佐野仁美・坂井康子
2. 発表標題 「音の違いに気づく表現活動の試み 和楽器を用いて」
3. 学会等名 日本学校音楽教育実践学会第24回全国大会（畿央大学）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坂井康子・佐野仁美・岡林典子
2. 発表標題 「和の音とかけ声を用いた授業実践の試み」
3. 学会等名 日本音楽教育学会第50回大会（東京芸術大学）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小畑郁男・佐野仁美
2. 発表標題 「鍵盤楽器に親しむ方法の開発 MIDIを用いた視覚要素の活用」
3. 学会等名 日本音楽表現学会第16回大会（広島文化学園大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小畑郁男・佐野仁美他
2. 発表標題 「描く、語る、音を紡ぐ 絵と言葉と音楽が出会う交差点」
3. 学会等名 レクチャーコンサート（長崎KTNギャラリー）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡林典子・坂井康子・佐野仁美・上木美佳
2. 発表標題 「子どもの創造性を引き出す教師の表現力」
3. 学会等名 日本保育学会第70回大会（川崎医療福祉大学）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐野仁美・岡林典子
2. 発表標題 「オノマトペを用いたリズム創作の可能性 幼小接続の視点から」
3. 学会等名 日本音楽表現学会第15回大会（東京音楽大学）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小畑郁男
2. 発表標題 「ロックン・ロールの音高構造分析モデル」
3. 学会等名 日本音楽表現学会第15回大会（東京音楽大学）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐野仁美・岡林典子
2. 発表標題 「絵本を用いた表現遊びにみる子どもの創造性の育ち」
3. 学会等名 全国大学音楽教育学会第33回全国大会（ホテル グランヴェール岐山）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 坂井康子・岡林典子・佐野仁美
2. 発表標題 「絵本から始まる表現活動の展開(3)」
3. 学会等名 日本乳幼児学会第27回大会(西南学院大学)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 坂井康子・岡林典子・佐野仁美
2. 発表標題 「絵本から始まる表現活動の展開(4)」
3. 学会等名 日本乳幼児学会第27回大会(西南学院大学)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小畑郁男・安藤政輝・佐野仁美・豊田典子
2. 発表標題 「声と筆のための作品制作 作曲者と演奏者による共同作業の試み」
3. 学会等名 日本音楽表現学会第14回大会(拓殖大学北海道短期大学)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 岡林典子・佐野仁美
2. 発表標題 「子どもの創造性を育む授業 絵本を用いた実践をもとに」
3. 学会等名 全国大学音楽教育学会第32回全国大会(鹿児島女子短期大学)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 小畑郁男・佐野仁美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ハンナ	5. 総ページ数 118頁
3. 書名 『音楽を教えるヒント〔表現・創作・鑑賞〕 小中学校接続を視野に入れて 』	

1. 著者名 小林順編著、佐野仁美（担当部分：「ビートルズの『古さ』と『新しさ』 クラシック音楽から眺めたビートルズ 」53-70頁）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 萌書房	5. 総ページ数 226頁
3. 書名 『よみつぐビートルズ』	

1. 著者名 山野てるひ他編著、佐野仁美（担当部分：36-39、64-67、88-91、136-139、169頁）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 一藝社	5. 総ページ数 200頁
3. 書名 『幼・保・小で役立つ 絵本から広がる表現教育のアイデア 子供の感性を豊に育むために 』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小畑 郁男 (Kobata Ikuo) (20149834)	福岡女学院大学・人文学部・非常勤講師 (37118)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------